源草公園を脱出して

中村吉蔵自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8842

27

大震災の日

中村孝也

新國劇一座の寓居を着て拘留せられて居るのを救ひ出さうとしていろく奔走したが、此方の思ふやうに捗取らず、先日来いよ〳〵先づ警視廳へ護送せられる事になつた九月一日の朝である。澤田正二郎の血まみれになつた白服姿のままで、護送自動車へ乗込んだかと思ふと、その刹那の光景を眼前に浮べながらウカウカ時が経つたが、善後策相

談の為のに、他の人達がもう公園劇場に集まってゐるのか、うしてはゐられぬと思ひしきり、だ大場省線で上野駅へ急いだ。下りれば駅から市街自動車へ乗こんだが、さみ合つてゐる中で、坐席がなく、中央の通路の棒にすがつて陛下の通り、行幸たまふる時である。乗客は例に漏れずに、殺伐にやうに、へだてなくしてみび合ひ。自分は自動車から大声で出したのかと思うて、周囲を見廻はしたりもんんな

気はひもをへ。へ。ぶつとして居れと制する声のする。忽ち西側の壁や九のガラス〈類しておしてあして、土砂の塵埃が黄黒く敷の地表に……大地震だ！と乗客は動揺くしてゐる。の様へ成る程、これは大地震だなと自分も気が附いたが、そのまゝ、自動車で疾走してゐれば大丈夫に、何廻までても走れ、走れと心でゆんだ。車掌もれの気でか全速力で走りはけて行く。雷門で駐まつに将は

もう地震は止んでゐたが、それからには半ごつの響、が見える。壁が倒れ、屋根瓦がすり落ちたのは軒下である。仲居さんたちの煙草屋は、畳の上に敷蒲団に坐けてゐる。その中をブッ倒されて、傳法院裏手から、公園劇場の方へ行く。急いで きかけたが、時折地震がするので、恐怖はいよ、あの假装式の洋風建築の高くなりんに中へ入って行くのが、非常に生命がけで、知人の仕事だと思へたので、引返して近所の廣場に立つた。

10 20 (YH特製)

3

それには多勢の避難者が青桐の樹の幹につかまって身を支へてゐる。地震は折れ来る。自分も樹の幹に手を掛けて足のよろけるのを防いだ。十二階は四階目から折れて、黄の方角に黄黒い煙がうつまき上つてゐる。公園劇場の正面のお、へ避難して来れのに、ヒョッコリ出逢した。連れ立って、近所の廣い空地へ入り、一息ついてゐると、空襲は近所の洋食屋の主人を見かけて、むすびを持って来た。自分もそれのむすび一つを

別行
変更

飛び、ソーダ水一杯飲む。

大しぶき。

暗赤色の

終りと云つたやうな感じが天地を包んでゐる。自分は大悟の自

宅の子の気にかゝつて、電車道へ戻ると、

もう夕暮迫まつてゐる。軒先の上には

洋傘を開いてゐる。その中を徒歩で

ゆく。前方から見下ろすと、赤傘が

ゆく。前方から出て

と、赤子の前方面から紅の焔が炎々と燃え

10
20
(YH特製)